

卒業生紹介

女性科学者が輝く時代へ — 猿橋賞を受けて —

Mizoguchi Noriko 溝口 紀子

溝口紀子さん プロフィール
東京学芸大学教育学部自然科学系准教授

1985年お茶の水女子大学理学部数学科卒業後、理学研究科に進学し、理学修士を取得。その後、東京工業大学大学院に進み、1900年理学博士。日本学術振興会特別研究員を経て、1993年東京学芸大学講師、1995年同助教授、2007年から現職。

自然科学分野で優れた業績を挙げた女性研究者に光を当て、その活動を奨励する「猿橋賞」。昨年（第31回）、本学理学部卒の溝口紀子さん（東京学芸大学准教授）が数学で4人目となる受賞の栄誉に輝いた。受賞理由は、微分方程式の解が急激に無限大になる「爆発」と呼ばれる現象後、状態が変化する「不完全爆発」を解明した功績による。お茶大理学部からは過去4名が受賞している。

ケセラセラな学生時代

「稀に見る数学的センスと強靱な計算力の持ち主」と研究仲間から畏怖される溝口さんだが、お会いしてみると、率直で気さくな数学者だ。「暗記モノや実験が嫌い」で、残ったのが数学だった。「数学は論理的に証明されて正しいか正しくないか、きっぱりしているところが好き」という。福岡県糸島市からお茶大理学部へ進学。慣れない東京の寮生活でホームシックにかかっているのではないかという家族の心配をよそに、「修学旅行のように楽しい日々」を過ごす。そのまま大学院に進んだのも、就職しなくなかったからで、「特に研究者になりたい訳ではなかった」という。若者特有の漠とした不安はあるものの、親の仕送りを受けながら好きな研究を続け、余暇はスキーやテニスに興じるという「モラトリアム」時代を過ごしながら、「いざとなればお嫁にいけばよい」と思っていた。博士号を東工大で取得後、2年のポスドク期間を経て東京学芸大に職を得た。そんな溝口さんに研究人生最大の転機が訪れる。

偶然をチャンスに変える

科学者は時として全く偶然に、目に見えない力で引き寄せられるようにして、新しい研究テ

マに遭遇することがあるという。溝口さんの場合は、研究会から帰国する機中でばったり会った顔見知りの先生が、「暇つぶしに」説明してくれた数学の問題がきっかけだった。自分の研究とは違う分野だったが興味を抱き、二人の共同研究が始まる。4年後、今度は単独で、関連領域で殆ど手付かずだったテーマに踏み込み、新しい手法を使って初の証明に成功。その成果が今回の受賞につながった。研究を始めた当初は文献も殆どなく、「ゼロからのスタートでアイデアだけが勝負」だったと振り返る。しかし、ここから溝口さんの真骨頂が発揮される。ハンディを逆に、「ブルドーザーのようなパワーと集中力（研究仲間評）」をもって研究を続ける。幸い、数学は一人でも出来る学問で、しかも競争相手もいなかった。「理系が一番でも二番でもダメ。誰も考え付かないことを思いつく、常に新しいものにトライする」姿勢が大事だと語る。そうして得た溝口さんの研究業績は、その独創性で海外の学会でも高く評価されている。

ハンディと好奇心は研究生活のバネ

溝口さんの数学者としてのスタートは遅い。新しい研究テーマに出会った時は35歳を超えていた。研究環境などハンディも山ほどあった。「ハンディのない人生なんてないし、スタートが遅くても、いつでも取り返しはつく。大事なのは純粋な好奇心を持つこと。研究を一生続ける力になる」とは、後輩へのメッセージでもある。

「アイデアが閃いた瞬間が喜びの極みで、後

に続く長い研究は殆どが苦しい」一方で、数学の持つ完璧で矛盾のない「美しさ」に魅せられてきた。自らも絵筆をとる溝口さんは、「芸術と同じような普遍的な価値があるものを、数学で作りたい」と述べている。

教育者としても厳しいサービス精神の持ち主だ。学生に興味を持たせるためにドンドン当てる。考えた結果であれば間違ってもよいが、安易な「分りません」は許さない。その代り、恥ずかしい質問もない。丁寧に答える姿勢に慕う学生も多い。ゼミの卒業生に、サッカー日本代表に選ばれた岩政大樹選手がいる。嬉しそうに、そう教えてくれた溝口さんに、熱烈なサッカーファンの顔が見えた。

文責：坪田秀子（学長特命補佐）

わたしのオフタイム

幼い頃、母親が毎月のように展覧会に連れて行ってくれた影響で、絵に親しむように。外国に行くと美術館巡りをするのが無上の楽しみ。好きな作家はモジリアニ。リタイヤーしたら油絵を描いて過ごすのが夢だ。息抜きの読書は軽いミステリー小説で。